

Title	三田哲学と私(7)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	西村, 皓(Nishimura, Hiroshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.71- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三 田 哲 学 と 私

名誉教授 西 村 皓

文学部開設百周年を記念してこのたび特集号を編纂される由まことに大慶に存じます。三田哲学会の会員に加えていただいて以来 40 年、その間いろいろと思い出も多くありますが、その二、三について述べてみたいと思います。その一つは、三田哲学例会での討論会ですが、塾の沢田先生と東大の大森先生の間で行なわれたものです。当時分析哲学や記号論理学が哲学の新しい課題として大方の学者を刺激する所が大きかったということもあって、そうした新しい学問と古来からの伝統をもつ形而上学との接点をめぐってお二人の間でそれぞれに意見を述べられ、それを中心にフロアのもものが討論に参加するという形をとっておりました。浅学の私には大変難かしい問題でしたが、大森先生の話のなかで、記号とか符号に対するリアンスがこの問題の根底にある、ということをおっしゃられたことが大変印象的でした。もう一つは、やはり沢田先生と仏文の白井先生の間で行なわれた討論です。これは当時やはり流行という用語弊があるかもしれませんが、サルトルの実存の思想をめぐっての討論でした。沢田先生は本当に哲学する人として、そしていつも自分の問題として学問に取り組まれている学者ですから、そうした姿勢がこの討論でもよく出ていたように思います。白井先生もサルトル研究者としてよく人に知られておりましたから、この討論は非常に活発に行なわれ興味深く拝聴いたしました。司会をされたのは佐藤朔先生だったと思います。佐藤先生が、この哲学者と文学者の討論がうまくかみ合うようにと大分苦心されていたことが印象に残っております。

そのほかにも多くの研究が発表され、私たち若い学徒に大きな刺激を与

えて下さったことを心から感謝するとともに、それは私にとって大変幸せなことだったと思います。

最後に蛇足になって申し訳ありませんが、いまから6年前に私ども同学の者が集まって、日本ディルタイ協会を設立しました。ディルタイおよびディルタイに関連する研究に従事されている全国の研究者が集まってできたもので、規模としてはまだ小さなものですが、毎年定期的に研究会と研究機関誌の発行が行なわれております。このことでは三田哲学会の大変有難いご援助をいただいております。とくにその発足に際していろいろとご教示をいただいた故三雲夏生先生にはあらためて感謝の意を表したいと思います。

学統あって学閥なし。これが慶應の学問の姿だと思います。門閥を忌み嫌った福沢諭吉の精神がしっかりと慶應の学問の根底に流れているように思います。三田哲学がこの学統を引きついで今後とも発展されるよう祈念いたします。